平成20年3月14日付　紀伊民報

世界遺産候補審査本格化

今月から32件ヒアリング

国連教育科学文化機関（ユネスコ）の世界文化遺産登録に向け、国内候補を選ぶ文化審議会特別委員会は今月下旬、応募があった32件を対象に提案自治体のヒアリングを行い、審査を本格化させる。

対象は、２００６年の公募で継続審査となり、昨年末に修正案を提出した「九州・山口の近代化産業遺産群」など24道県の19件と、昨年応募した大阪府の「百舌鳥・古市古墳群」など12道府県の13件。

時代別の4グループに分け、遺産の文化的価値の重要性や世界遺産登録に向けた地元の推進態勢などを非公開で聴き、今年の夏にも各国の推薦候補を載せたユネスコの「暫定リスト」に追加申請する国内遺産を決める。

選に漏れた場合、来年も審査を継続するか打ち切るかは白紙。文化審の委員からは「提案を練った自治体の努力は相当なもの。落選しても何らかのフォローが必要」「世界遺産が無理でも『日本遺産』として保護したらどうか」との意見も出ている。文化審は今夏に、公募方式自体の見直しも含めて結論を出す。

日本の世界文化遺産は従来、文化審が独自に候補を選び、１９９３年の法隆寺（奈良県）から２００７年の石見銀山遺跡（島根県）まで計11件が登録済み。公募は新たな候補を掘り起こすため06年に初めて実施し、応募の中から富岡製糸場（群馬県）、富士山（山梨、静岡県）など4件が暫定リスト入りを果たした。